

# 『無量寿経論』テキスト研究

——響堂山石刻本、金粟山大蔵経写本を中心として——

辻 本 俊 郎

## 一、はじめに

西暦一九九五年から一九九七年にかけて佛教大学総合研究所において「浄土教の総合的研究」研究班（代表者・香川孝雄博士）が編成され、その一翼「『往生論』（『無量寿経論』）班」に筆者も参加する機縁を得た。そして、最終的に当研究班では『無量寿経論校異』（その当時、研究班で蒐集された『無量寿経論』テキストの中で完本、かつ最古のテキストである宋・東禅寺版を底本とし、対校本として宋・開元寺版、宋・思溪版、宋・磧砂版、元・杭州版、高麗再雕版、房山雷音洞石刻本、房山雲居寺刻本、正倉院聖語蔵写本、親鸞加点本『論註』所引『無量寿経論』が使用された。）を研究成果の一部として公にして解散した。その後、筆者は、「浄土教の総合的研究」研究班において蒐集された『無量寿経論』テキストの字句の異同、改行箇所などを精査し、その系統づけを試みた。<sup>①</sup>大きく分類すると三系統、さらに細かく分類すると次のようになる。すなわち、

- A ① 宋・東禪寺版、開元寺版
  - A ② 宋・思溪版
  - A ③ 宋・磧砂版、元・杭州版 明・洪武南藏
  - A ④ 明・永樂北藏、明・嘉興藏、清・龍藏
  - B ① 高麗再雕版、房山雲居寺石刻本
  - B ② 中華民國・頻伽藏
  - C 曇鸞『論註』所引本、流布本
- である。

すなわち、Yasubandhu (天親、世親ともいう。西暦四〇〇〜四八〇年) 著・Bodhiruci (菩提流支) 漢訳の『無量寿経論』<sup>(2)</sup> テキストには石刻本として三本あることが知られている。すなわち、響堂山石刻本、房山雷音洞石刻本、そして、房山雲居寺石刻本である。この中で房山雷音洞石刻本は、塚本(一九三五)にその拓本の写真が掲載されている。また、房山雲居寺石刻本については、『房山石経(遼金刻経)』中国仏教協会に収められている。しかし「浄土教の総合的研究」研究班活動当時、石刻本三本の中で響堂山石刻本がすでに風化していたとの情報に接していたので、この響堂山石刻本は対校本として採用されないどころか、調査すらされなかったのであるが、近年になってその翻刻と拓本が公開されたのである。つまり、完全に風化した状態でなかったということがここで判明したのである。

また、その当時、研究班で全く調査されないどころか組上にもものぼらなかつた金粟山広恵禅院写本大蔵経(北宋時代)『無量寿経論』が、これも近年になって上海古籍出版社よりその影印本が出版されたのである。

したがって、小論ではいわば新出資料と言うべき響堂山石刻本、及び金粟山大藏經写本の『無量寿経論』テキストに限定して検討を加え、果たしてこれらのテキストが『無量寿経論』テキストのどの系統に位置するのかを明らかにしたい。

## 二、響堂山石刻本『無量寿経論』

響堂山石窟（鼓山石窟）は北齊（西暦五五〇～五七七年）の都・鄴（現在の河北省臨漳県）鼓山西側の山腹に位置する。それは石灰岩質の岩山に北洞、中洞、南洞の三つに分かれており、文宣帝（西暦五二九年～五五九年）の時代に完成した。

近年になって謝〔二〇〇六〕によって、響堂山石刻本に関する重厚な論文が発表されたのである。その中で謝〔二〇〇六〕は、「一行目は経題・作者「無量寿経論・優波提舍願生偈、婆藪槃豆菩薩造」の刻銘である。二行目からは五言の偈頌で行二〇字、二五行で構成されている。そのうちの二一、二二行目は各一〇字であるので、願生偈の全体がさらに三段に区切られていたのが知られる」（三八八頁）と報告している。

さて、ここで採り上げる『無量寿経論』は南洞の間口、すなわち、窟外南側の外壁に刻されているのであるが、非常に残念ことに長行は刻されておらず、願生偈の部分のみ刻されているのである。しかし、それは前述したように北齊時代のものであり、『無量寿経論』は菩提流支によって西暦五三一年、あるいは西暦五二九年に訳出されているのであるから、注目すべきテキストであることに相違ない。謝〔二〇〇六〕によれば、「武平三年（五七二）に完成した外壁の『彌勒成仏経』が未来に衆生を弥勒仏にまみえさせるという祈願として造り出されたが、それに

応じて、もう一方に『無量寿経論』願生偈が追刻された」（三九三頁）とする。ということは、『無量寿経論』が響堂山に刻されたのは、西暦五七二年以降、しかもそれほど年月を経ていないであろうと思われる。つまり、菩提流支による漢訳後、わずかおよそ四〇数年後に刻されたということになり、菩提流支が漢訳した、いわゆるオリジナル、あるいはそれに非常に近い情報を我々に伝えているのではないかと考えられるのである。

一方その翌年には張林堂〔二〇〇七〕が響堂山石刻本『無量寿経論』の書誌情報とともに翻刻も併せて発表したのである。それによると、

位置 大業洞口右側

時間 北斉（公元五六八―五七七年）

尺寸 長一〇八糎、寛一三〇糎

无量寿経論	優波提舍願生	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	樹	<input type="checkbox"/>	豆	菩薩	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
世尊	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	歸命盡十方	无	<input type="checkbox"/>	光如來	願生	<input type="checkbox"/>	樂國		
我	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	多羅	<input type="checkbox"/>	實公德相	説願偈	<input type="checkbox"/>	與佛教相應			
觀	<input type="checkbox"/>	世界相	勝過三界道	<input type="checkbox"/>	竟如虛空	<input type="checkbox"/>	大无边際				
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	慈悲	出世善	<input type="checkbox"/>	生	<input type="checkbox"/>	光明滿足	如鏡日月輪			
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	性	具足妙	<input type="checkbox"/>	嚴	<input type="checkbox"/>	光	<input type="checkbox"/>	熾	明淨曜世間	
<input type="checkbox"/>	性	<input type="checkbox"/>	徳草	柔軟左右旋	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	生勝樂	過	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	陁

□□□万□	弥□池流泉	□風動□葉	交錯□□轉
□□□□□	觀十方无邊	雜樹異光色	寶□□□遶
无□□□□	羅網遍虛空	種種□□□	□□□□□
雨□□□□	无量香齊動	佛□□淨日	除□□闇□
梵聲□□□	□妙□□□	正覺阿弥陀	□王□□□
□□□□□	□□□□□	□樂□□□	禪三昧為願
□□身□□	□□常无□	大華善□□	等无□□□
□□□□□	□□□不來	□□□願樂	一切□□□
□我□□□	□□□佛□		
无量大寶王	□妙淨華臺	相心光□□	色像超□□
如來微妙聲	梵響聞十方	□地水□□	□空无□□
天人不動衆	清淨智海生	如須弥山□	□妙无□者
能令速滿足	功德大寶海		
安樂國清淨	常轉无垢□	化佛菩薩□	如□□□□
无垢庄嚴光	一念及一□	普照諸佛□	秋□諸□□
雨天樂華衣	妙香寺供養	□佛諸功□	无□分別心
何等世界无	佛法功德寶	我皆願往□	□□□如佛
我作論說偈	願見弥陀佛	普共諸衆□	□□□□□

とあるが、一見したところこの張〔二〇〇七〕の翻刻は俄かに信用しがたいところがあることに気付かされるのである。<sup>(6)</sup>それは太字で示した文字である。

まず、「□□□樹□豆 菩薩□□□」であるが、『無量寿経論』のサンスクリット語原典での著者は「婆藪槃豆菩薩」、すなわち、Vasubandhuであることは言うまでもない。ということは「樹」という文字があること自体理解しがたいのである。著者名として「樹」という文字は「龍樹菩薩」を想起させるものである。仮に「龍樹」であるとするならば、「豆」という文字があることに理解に苦しむ。しかも、謝〔二〇〇六〕は一行目を「無量寿経論優波提舍願生偈 婆藪槃豆菩薩」と報告しており、張〔二〇〇七〕の翻刻と異なっているのである。

同様にこの他にも疑わしい翻刻がいくつか存在するのである。すなわち、「□實公德相」という句は、本来ならば「眞實功德相」とあるべき句である。また、「无量香齊動」は「无量香普勲」、「□□□不來」は「二乗種不生」、「相心光□□」は、「相好光一尋」、「秋□諸□□」は「利益諸群生」、それぞれ後者が現に我々が目にするテキストの句である。

ところが、幸いなことに張〔二〇〇七〕四四頁には拓本の写真が掲載されている。それ見ると確かに前述した常盤の報告にあるように風化の状態が甚だしいのであるが、判読できない文字も決して少なくないといえ、張〔二〇〇七〕の翻刻を訂正することができるのである。以下、拓本の写真より翻刻してみよう。風化が著しく判読不能文字は□で示し、改行箇所は「マークで表す。また、太字は後に検討する字句であるが、他のテキストの異同で問題となる語句である。

无量寿経論 優波提舍願生偈 婆藪□豆菩薩□

世尊□一心	歸命盡十方	无碍光如來	願生□樂國
我□□多羅	□實功德相	說願偈□□	與佛教相應
觀□世界相	勝過三界道	□竟如虛空	□大无边際
□□□慈悲	出卅善□生	□光明滿足	如鏡□□□
□□□□性	具足妙□嚴	□□光炎熾	明淨曜卅間
□性□德草	柔軟左右旋	□□生勝樂	過□□□陀
□□□方種	弥覆池流泉	□風動□葉	交錯□乱轉
□□□□□	觀十方无碍	雜樹異光色	寶蘭□圍遶
无□□□□	羅網遍虛空	種種鈴發響	□□□□□
雨□□□□	无量香普勲	佛慧□淨日	除□□閻□
梵聲□□□	□妙□□□	正覺阿弥陀	法王善住持
□□□□□	□□□□□	□樂□□□	禪三昧為食
□離身□□	□□常无□	大乘善□□	等无□嫌名
□人□□□	□□□不□	□□□願樂	一切□□□
<b>故我□□□</b>	□□□佛國	无量大寶王	微妙淨華臺
相好光□□	色像超□□	如來微妙聲	梵響聞十方
同地水□風	□空无□□	天人不動衆	清淨智海生
如須弥山王	□妙无□者	天人丈夫衆	恭敬遶瞻仰



觀佛本願力 □□空□者 能令速滿足 功德大寶海」  
安樂國清淨 常轉无垢輪 化佛菩薩□ 如□□□□  
无垢庄嚴光 一念及一時 普照諸佛會 利□諸□□  
雨天樂華衣 妙香等供養 □佛諸功□ 无□分別心  
何等世界无 佛法功德寶 我皆願往□ 示□□如佛  
我作論說偈 願見弥陀佛 普共諸衆□ □□□□□

となる。

これによって前述した「□□□樹□豆 菩薩□□□」、「□實公德相」、「无量香齊動」、「□□□不來」、「相心光□□」、「秋□諸□□」は、張〔二〇〇七〕の翻刻の誤りであり、正しくは、それぞれ「婆藪□豆菩薩□」、「眞實功德相」、「無量香普勲」、「二乘種不生」、「相好光一尋」、「利益諸群生」と訂正できるのである。

ところで、ここで特に問題としたいのは張の翻刻の訂正ではない。問題は太字で表した句である。以下、順に見ていきたい。

①「□□生勝樂」。宋・東禪寺版では、「身觸生諸樂」となっており、宋・磧砂版や高麗再雕版、正倉院聖語藏写本、曇鸞『論註』所引本『無量寿経論』、後述する金粟山大蔵経写本では「觸者生勝樂」となっている。したがって、ここでは宋・東禪寺版ではなく、宋・磧砂版や高麗再雕版、金粟山大蔵経写本、正倉院聖語藏写本、曇鸞『論註』所引本『無量寿経論』などを支持している。繰り返すことになるが響堂山石刻本が『無量寿経論』漢訳後、四〇数年後の成立ということを考えれば、漢訳された当時の姿、あるいはそれに近いのではないか。ということとは、



「身觸生諸樂」ではなく、「觸者生勝樂」が原型であったのではないかと考えられる。

② 「梵聲□□□」。高麗再雕版、雲居寺石刻本ではこの句では「梵聲語深遠」であり、宋・東禅寺版、宋・磧砂版や金粟山大藏經写本、正倉院聖語藏写本、曇鸞『論註』所引本『無量寿經論』では「梵聲悟深遠」なのである。部首（「ごんべん」と「りっしんべん」）は異なるが、読み（「ゴ」、旁（「吾」）は同じであるために生じた異読であろう。しかし、非常に残念なことであるが、最古の『無量寿經論』テキストである響堂山石刻本では「語」、あるいは「悟」であるのか、磨滅して判読できないのである。

③ 「故我□□□」。宋・東禅寺版、宋・磧砂版や高麗再雕版、金粟山大藏經写本、正倉院聖語藏写本などでは、「故我願往生」となっており、『論註』所引本では「是故願往彼」となっている。ここで確実に言えることは現存する最古のテキストである響堂山石刻本が、曇鸞『論註』、あるいは『論註』所引本『無量寿經論』ではなく、『無量寿經論』テキストそのものを参照したことは明らかであるということである。

④ 「□佛諸功□」。宋・東禅寺版、宋・磧砂版や高麗再雕版、金粟山大藏經写本、正倉院聖語藏写本では「讚佛諸功德」となっており、曇鸞『論註』所引本では「讚諸佛功德」となっており、やはり前者を支持しているのである。ところで、③「故我□□□」④「□佛諸功□」については、最古の『無量寿經論』テキストである響堂山石刻本より判断して、それぞれ「故我願往生」「讚佛諸功德」が原型であろうとの判断が成り立つ。しかしながら、実際に漢訳者菩提流支と出会った曇鸞が『論註』において「是故願往彼」、「讚諸佛功德」という文言に対して註を施したことも事実である。ということは、菩提流支による訳出直後、すでに『無量寿經論』としてのテキスト、あるいは『論註』所引本としての『無量寿經論』テキストの二系統が流布していたと考えられる。そこで、どちらの系統のテキストが果たして菩提流支が漢訳したテキストであろうかという新たな問題も生じる。これについては別稿を

用意したいと考えている。

⑤「我皆願往□」。高麗再雕版、金粟山大藏經写本、正倉院聖語藏写本では「我皆願往生」、曇鸞『論註』所引本、宋・東禅寺版、宋・磧砂版などでは「我願皆往生」となっており、前者を支持している。ここで一つ言えることは、①③④⑤ではそのいずれも正倉院聖語藏写本を支持しているのであり、このことは、「願生偈」「長行」ともにそろっている、正倉院聖語藏写本がオリジナルに近い情報、言い換えれば、より正確な読みを伝えているのではないかと、つまり、『無量寿経論』テキスト校訂本を作成する場合の底本とされるべきテキストであると考えられる。

⑥響堂山石刻本は、二か所、すなわち「□□□佛國」という句、及び「功德大寶海」という句で改行して、その内容、すなわち、「願生偈」の内容を三つに分けているのである。いわゆる「佛国土功德莊嚴」、「佛功德莊嚴」「菩薩功德莊嚴」というパラグラフとして改行しているのである。つまり、響堂山石刻本は、『無量寿経論』の願生偈の意味内容を意識していたということになる。

さて、響堂山石刻本に次いで、古いテキストが、房山雷音洞石刻本である。房山は、北京の西南に位置する。もともと幽州（北京）にある智泉寺の静琬（？～西暦六三九年）という僧が、北魏・太武帝の廃仏、北周・武帝の廃仏もあって、また、末法という時代になって仏教の滅んでしまうという危機感を抱いて石に仏典を刻んで穴の中に封蔵する<sup>7)</sup>。すなわち、仏教経論を世に広めるといふ目的ではなく、石に刻むということでも永く後世の人々のために仏教経論を遺そうとしたのである。塚本善隆（一九七五）によると、「雷音洞の刻経こそ、静琬が末法護法の為に、最も重要と認めたものを大藏経中から選り出して先ず刻したもの、（中略）現在の雷音洞は、元時代に高麗僧の慧月が修補を加えたものである。しかし、彼の修補も本来この洞に存しなかった別の経を、任意に選んで補刻したのではなく、旧来存したものの破損せる部分を、旧例によって同じ経を刻し補ったもの」（三九五頁）とする。すな

わち、房山雷音洞に刻されている経論<sup>(8)</sup>は隋末唐初の中国における重要な経論であることが容易に理解できよう。このテキストの拓本は、京都大学人文科学研究所に保管されている<sup>(9)</sup>。また、塚本「一九三五」にこの拓本の写真が紹介されている。以下それにしたがって、翻刻してみよう。

優波提舍願生偈

世尊我一心 歸命盡十方 无礙光如來 □□□□□ 我依脩多羅 真實功德相 說願偈捨持 與佛教相應 觀彼世界相 勝過三界□ □竟如虛空 廣大无边際正道大慈悲 出世善根生 淨光明滿足 如鏡□□□ □諸珍□□ 具足妙莊嚴 无垢光炎熾 明淨曜世間 寶性功德草 柔軟左右□ 身觸生諸□ 過迦旃隣陀 寶華千萬種 弥覆池流泉 微風動華葉 交錯光乱□ 宮殿諸樓閣 觀十方无碍 雜樹異光色 寶蘭遍圍遶 无量寶交絡 羅網遍虛空 種種鈴發響 □吐妙法音 雨華衣莊嚴 无量香普勲 佛慧明淨日 除世癡冥闇 梵聲悟深遠 微妙聞十方 正覺阿弥陀 法王善住持 如來淨華衆 正覺華化生 □□佛法味 禪三昧為食 永離身心惱 受樂常无間 大乘善根界 等无譏嫌名 女人及□缺 二乘種不生 衆生所願樂 一切能滿足 故我願往生 阿弥陀佛國 无量□□王 微妙淨華臺相好光一尋 色像超羣生 如來微妙聲 梵響聞十方 同地水火風 虛空无分別 天人不動衆 清淨智海生 如須弥山王 勝妙无過者 天人文□□ □敬遶瞻仰 觀佛本願力 遇无空過者 能令速滿足 功□大寶海 □□□清淨常轉无垢輪 化佛菩薩日 如須弥住持 无垢莊嚴光 一念及一時 普照諸□會 利益諸羣生 雨天樂華衣 妙香等供養 讚佛諸功德 无有分別心 何等世界无 佛法功德寶 我願皆往生 示佛法如佛 我作論說偈 願見弥陀佛 普共諸衆生 往生安樂國

北齊時代に刻された響堂山石刻本と比して、雷音洞石刻本は隋末唐初に刻されたものであるので、磨滅して判読できない文字はかなり減っている。それでもなお判読不可能な文字も多少は存在する。

ここで問題とするのが、太字で記した句である。

①「除世癡冥闇」。「冥闇」となっているのは、雷音洞石刻本のみである。その他のテキスト、すなわち、響堂山石刻本、宋・東禅寺版、宋・磧砂版、高麗再雕版、金粟山大蔵経写本、正倉院聖語蔵写本、『論註』所引本『無量寿経論』はすべて「除世癡闇冥」となっている。ただし、不思議なことに宋・東禅寺版のみが願生偈では「除世癡闇冥」となっているのに対して長行では「除世癡冥闇」となっている。

②響堂山石刻本は、「仏国土功德莊嚴」「仏功德莊嚴」「菩薩功德莊嚴」と意味内容で改行を施していたが、雷音洞石刻本には改行箇所は一か所もない。

③「身觸生諸□」。「梵聲悟深遠」。「故我願往生」。「讚佛諸功德」。「我願皆往生」。これらの異読についてはすでに前節で述べたが、響堂山石刻本から判断すると、「梵聲悟深遠」については確定的なことは言えないが、「身觸生諸□」、「故我願往生」、「讚佛諸功德」、「我願皆往生」についてはそれぞれ「觸者生勝樂」「故我願往生」、「讚佛諸功德」、「我皆願往生」が原型であると考えられる。

### 三、金粟山写本大蔵経『無量寿経論』

西暦一九九九年になって、上海図書館・上海古籍出版社編『上海図書館蔵・敦煌吐魯番文献④』が出版された。その中に金粟山写本大蔵経『無量寿経論』の影印が公開されている。<sup>10)</sup> それ(三六頁)によると、

宋写、卷子、潢細麻紙十五紙、高三二cm 長九一三cm 紙幅六一cm 卷心高二四cm 天頭四・五cm 地脚三・五cm 每紙三〇行 每行一七字 朱絲欄 楷書 墨色濃とある。

この金粟山写本大藏経は、北宋時代（西暦一一世紀）金粟山広惠禅院写本大藏経<sup>(1)</sup>のことであり、浙江省海塩県に位置する。

さて、大藏経というのは、およそ三つの系統に分類されている。すなわち、(一)開宝藏系、(二)契丹藏系、そして、(三)江南諸藏系である。

まず、開宝藏系というのは、一板一紙、每版二三行、一行あたり一四字、千字文による帙番号は、唐・智昇『開元釈経録略出』より一字繰り上げである。

契丹藏系は、一板一紙、每版二七〜二八行で、一行あたり一七字であり、基本的に卷子本の形態を採っている。

千字文による帙番号は開宝藏系とは逆で『開元釈経録略出』より一字繰り下げである。唐代における長安写経の系譜を汲むものであり、正倉院聖語藏写本や敦煌写本の大部分もこの系統に属している。

江南諸藏系は、一板一紙、每版三六行、一行あたり一七字、基本的に折本の形態を採っている。千字文による帙番号は『開元釈経録略出』と一致する。

金粟山大藏経写本『無量寿経論』は、千字文による帙番号は「習」である。他の大藏経の『無量寿経論』テキストの帙番号を見てみると、高麗再雕版が「虚」、宋・東禅寺版、宋・開元寺版、宋・思溪版、宋・磧砂版、明・洪武南蔵が「堂」、そして、房山雲居寺石刻本が「習」の帙番号である。

「虚」「堂」「習」の千字文は、「空谷傳聲 虚堂習聴」（誰もいないはずの谷に声が響いており、誰もいないはず



の堂に声が響いてそれを学ぶ」の順である。したがって、ここで取り扱う金粟山大蔵経写本『無量寿経論』は「習」の帙番号であるので、房山雲居寺石刻本と同様、西暦一―世紀前半に雕蔵された「契丹版大蔵経」系統である事実を立証しており、貴重なテキストであると言えよう。

ところで、金粟山大蔵経写本の長行では、上海図書館・上海古籍出版社編（一九九九）での報告であったように基本的には一行一七字であるが、願生偈では一行に四句ずつ配され、「阿彌陀佛國」、「功德大寶海」という句でそれぞれ改行がなされている。これは「仏国土功德莊嚴」「仏功德莊嚴」「菩薩功德莊嚴」という内容区分されている。また、長行での改行箇所については、次の一二箇所である。「マークが改行箇所を表す。すなわち、

- ① 十六句及一句次第説應知
- ② 八者不虛作住持莊嚴
- ③ 自利利他功德莊嚴次第成就應知
- ④ 往生示佛法如佛故
- ⑤ 攝二種清淨應知
- ⑥ 般若撰取方便應知
- ⑦ 遠離障菩提心應知
- ⑧ 妙樂勝真心應知
- ⑨ 是名入第一門
- ⑩ 是名入第二門
- ⑪ 是名入第三門

⑫「三菩提故」

である。この改行箇所は高麗再雕版、雲居寺石刻本と一致するのである。<sup>(12)</sup>

さて次に金粟山大藏經写本『無量寿経論』の字句の異同等を確認したい。ただし、紙幅の関係上、特に興味深いところに絞って検討する。

①「梵聲悟深遠」。「讚佛諸功德」。「我皆願往生」。これらについてはすでに前節で紹介した。しかし、改めてここで「悟」について述べたい。というのは、金粟山大藏經写本では「悟」を支持しているのであるが、金粟山大藏經写本と同じ系統の契丹系である房山雲居寺石刻本では「語」となっているのである。これは何を意味しているのだろうか。「語」を支持しているのは高麗再雕版と房山石刻本のみである。正倉院聖語藏写本をはじめとする、その他のテキストすべて、「悟」を支持しているのである。この事実は「語」ではなく「悟」の読みが正しいのではないかとの推測が成り立つのである。

②「何等五念門」「一者礼拝門」。宋・東禅寺版のみが「何等五門」。正倉院聖語藏写本、金粟山大藏經写本、宋・磧砂版、高麗再雕版、雲居寺石刻本、『論註』所引本は、「何等五念門」となっている。また、「一者礼拝門」（以下、「二者讚歎門」「三者作願門」「四者觀察門」「五者迴向門」も同様）であるが、宋・東禅寺版、宋・磧砂版が「一者礼拝」となっており、「門」の文字がない。それに対して正倉院聖語藏写本、金粟山大藏經写本、高麗再雕版、雲居寺石刻版、『論註』所引本は「一者礼拝門」となっている。

③「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」。これを支持しているのは、正倉院聖語藏写本、金粟山大藏經写本、高麗再雕版、雲居寺石刻本、『論註』所引本である。それに対して、宋・東禅寺版や磧砂版では「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」となっている。



④ 「不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首成就大悲心故」。金粟山大藏經写本や正倉院聖語藏写本、高麗再雕版、雲居寺石刻本はこれを支持し、宋・東禪寺版、磧砂版では「於彼觀察一切世間苦惱衆生同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧方便作願迴向攝取衆生不捨一切世間故」と大きく異なっている。

⑤ 「彼仏国土功德莊嚴者成就不可思議力故」。金粟山大藏經写本や正倉院聖語藏写本、高麗再雕版、雲居寺石刻本はこれを支持し、宋・東禪寺版では「彼仏国土功德莊嚴不可思議力故」となっており、「者成就」の字句がなく、『論註』所引本では「彼仏国土莊嚴功德者成就不可思議力故」とあり、「功德莊嚴」が「莊嚴功德」となっているのが特色である。

⑥ 「彼無量寿仏土莊嚴第一義諦妙境界」。金粟山大藏經写本や正倉院聖語藏写本、高麗再雕版、雲居寺石刻本はこれを支持し、それに対して宋・東禪寺版、磧砂版、『論註』所引本では「彼無量寿仏国土莊嚴第一義諦妙境界相」とあり、「仏土」が「仏国土」、「妙境界」が「妙境界相」とある。

⑦ 「一者無染清浄心不以為自身求諸樂故」。金粟山大藏經写本や高麗再雕版、雲居寺石刻本はこれを支持し、正倉院聖語藏写本、宋・磧砂版、『論註』所引本では「一者無染清浄心以不為自身求諸樂故」とあり、ここで初めて金粟山大藏經写本と正倉院聖語藏写本と異なる字句を示している。

⑧ 「随順名義称如来名依如来光明智相修行故得入大会衆数」。金粟山大藏經写本や宋・東禪寺版、『論註』所引本がこれを支持している。正倉院聖語藏写本、高麗再雕版、房山雲居寺石刻本は「随順名義称如来名依如来光明智修行故得入大会衆数」、宋・磧砂版では「随順名義称如来名依如来光明知相修行故得入大会衆数」とある。ここでも⑦と同様、金粟山大藏經写本と正倉院聖語藏写本と異なる字句を示している。

⑨ 「無量寿修多羅優波提舍願生偈略解義竟」。この文は、宋・東禪寺版、磧砂版、『論註』所引本にはこの文が存し

ているのであるが、金粟山大藏経写本、正倉院聖語藏写本、高麗再雕版、雲居寺石刻本にはこの文が存しないのである。

#### 四、まとめ

以上、『無量寿経論』の響堂山石刻本、及び金粟山大藏経写本について字句の異同等に注目をしつつ検討してみた。

まず、響堂山石刻本については、張〔二〇〇七〕の翻刻を訂正することが出来た。また、北齊時代に刻されたことを考慮すると、他テキストとのいくつか異同があったが、その中で次の四句、すなわち、「觸者生勝樂」「故我願往生」、「讚佛諸功德」、「我皆願往生」が原型であると考えられるのである。

一方、金粟山大藏経写本については、「契丹版」の系統を汲むものであることが明らかになり、房山雲居寺石刻本と同じ系統のテキストであることが判明した。また、「願生偈」の異同より金粟山大藏経写本と響堂山石刻本、さらに正倉院聖語藏写本は、強い近似性が見られたので、同一系統のテキストであると判断できるのである。さらに言えば、響堂山石刻本（北齊時代）、金粟山大藏経写本（北宋時代）に対して正倉院聖語藏写本は平安時代の写本であるが、奈良時代の転写本であり、しかも「願生偈」「長行」ともにそろっていることから、正倉院聖語藏写本が『無量寿経論』テキストの底本的な役割を果たすものではないか、と考えられるのである。

今回の検討の結果、響堂山石刻本と金粟山大藏経写本を含めた『無量寿経論』テキストの系譜は次の通りになる。

- A ① 宋・東禅寺版、開元寺版
- A ② 宋・思溪版
- A ③ 宋・磧砂版、元・杭州版 明・洪武南蔵
- A ④ 明・永樂北蔵、明・嘉興蔵、清・龍蔵
- B ① 高麗再雕版、
- B ② 房山雲居寺石刻本、響堂山石刻本、金粟山大蔵経写本、正倉院聖語蔵写本
- B ③ 中華民国・頻伽蔵
- C 曇鸞『論註』所引本、流布本

この中で古い形態を有しているテキストが B ② 房山雲居寺石刻本、響堂山石刻本、金粟山大蔵経写本、正倉院聖語蔵写本であり、特に正倉院聖語蔵写本は平安時代の書写ではあるが、奈良時代の転写本ということを考えれば、最も重要なテキストであると考えられるのである。

註

- (1) 『無量寿経論』テキストの系統の詳細については辻本〔一九九九〕、〔二〇〇四〕を見よ。
- (2) 『無量寿経論』のタイトルに関しては辻本〔二〇一〇〕を見よ。
- (3) 響堂山南洞には、『弥勒成仏経』、『勝鬘経』、『字経』、『維摩経』、『無量義経』、『無量寿経論』、『唐邕刻経記』が存する。

(4) 南洞は、文宣帝の追福のために造営された。常盤大定〔一九二六〕は、響堂山石窟について「洞の大きさ広二十三尺三寸 深十五尺八寸（中略）三面に三尺の壇を作り、三面に各一坐佛を中心として、左右に両羅漢・四菩薩を配してあるから、三面共に七尊で、入口の内壁に「無量義経」の文を刻し、外面に「願生偈」を刻し、更に「維摩経」を刻してある」（四九八頁）云々と報告している。

また、近年になって謝〔二〇〇六〕は「窟の内部は幅四・一m、奥行三・四mほどで、前方に奥行一・三mほどで、間口三間の瓦葺木造建築を模した前廊部を設けるが、更に隅棟を具えた石造瓦葺の屋根の真上に附属の小型の窟が造り出されている」（三六三頁）云々と報告している。

(5) 隋・費長房『歴代三宝紀』（西暦五九七年）（『大正蔵』四九卷八六上）、道宣『大唐内典録』（西暦六六四年）（『大正蔵』五五卷二六九中）などは普泰元年、すなわち、西暦五三二年漢訳説を採り、唐・智昇『開元釈経録』（西暦七三〇年）（『大正蔵』五五卷五四一上）は永安二年、すなわち、西暦五二九年漢訳説を採る。

(6) 張林堂編〔二〇〇七〕に響堂山石刻本『無量寿経論』が紹介されていることを筆者にご教示してくださったのは龍谷大学専任講師内田准心博士である。ここに記して感謝申し上げる。

(7) 雷音洞の外側左壁にある石面に『貞観二年静琬題別』が刻されている。その冒頭には次のようにある。「〔釈迦如来正法像法〕凡〔千五百余歳〕至今〔貞〕観二年。〔已浸末〕法七十五載。仏日既没」云々とある。つまり、貞観二年、すなわち西暦六二八年当時、世の中はすでに末法の時代となって早七五年が過ぎ去ったとあるのである。

(8) 雷音洞に刻されている経論は次の通りである。すなわち、  
妙法蓮華経（鳩摩羅什訳）、維摩詰所説経（鳩摩羅什訳）、勝鬘師子一乘大方广経（求那跋陀羅訳）、金剛般若波羅蜜経（菩提流支訳）、無量義経（曇摩伽陀耶舎訳）、仏臨般涅槃略説教戒経（鳩摩羅什訳）、温室洗浴衆僧経（安

世高訳）、観弥勒菩薩上生兜率陀天経（泪渠京声訳）、大方広華嚴経浄行品菩薩百四十願（仏駄跋陀羅訳）、願生偈（菩提流支訳）、菩薩地持戒品受菩薩戒法（曇無讖訳）、八戒斎法、大王観世音経、賢劫千仏出賢劫経、十方経、三十五仏名並部懺悔、五十三仏名である。

(9) 以前に筆者は佛教学大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班の一員としてこの拓本の調査を行ったことがある。拓本の大きさは縦六九・六糎、横七五・二糎、一マスの大きさは縦二・三糎、横二糎である。

(10) 上海図書館。上海古籍出版社編（一九九九）に金粟山写本大蔵経『無量寿経論』が紹介されていることを筆者にご教示して下さったのは龍谷大学准教授佐々木大悟博士である。ここに記して感謝申し上げます。

(11) 折本ではなく利用に不便な卷子本の形態を採っている。

(12) 曇鸞は『論註』において長行の章分けを十節に分けている。すなわち、「願偈大意」「起観生信」「観察体相」「浄入願心」「善巧撰化」「障菩提門」「順菩提門」「名義撰対」「願事成就」「利行満足」である。しかし、曇鸞の章分けに従って、改行を施している『無量寿経論』エキスとは皆無である。また、宋。東禅寺版などの改行箇所については辻本（一九九九）を見よ。

#### 【参考文献】

- 大内文雄（一九九七）「宝山靈泉寺石窟塔銘の研究」『東方学報』六九冊。
- 小川環樹、木田章義注解（一九九七）『千字文』岩波書店。
- 桐谷征一（一九九六）「中国北斉期における摩崖、石壁刻経の成立」『勝呂信静博士古稀記念論文集』山喜房仏書林。
- 気賀沢保規編（一九九六）『中国仏教石経の研究』京都大学学術出版会。

謝振發〔二〇〇六〕「北響堂山石窟南河北齊石經試論―唐邕の刻經事情をめぐって―」『中国美術の図像学』三六一―四一〇頁。

上海図書館、上海古籍出版社編〔一九九九〕『上海図書館蔵、敦煌吐魯番文献④』上海古籍出版社。

諏訪義純〔一九八八〕『中国中世仏教史研究』大東出版社。

曾布川寛〔一九九〇〕『響堂山石窟考』『東方学報』六一冊。

竺沙雅章〔一九七八〕『契丹大蔵経小考』『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎。

竺沙雅章〔一九九一〕『開宝藏』と『契丹蔵』『古典研究会創立25周年記念国書漢籍論集』汲古書院。

竺沙雅章〔一九九三〕『漢訳大蔵経の歴史―写経から刊経へ―』『第77回大蔵会記念講演記録』大谷大学。

竺沙雅章〔二〇〇一〕『宋元佛教文化史研究』汲古書院

中国仏教協会・日中友好仏教協会編〔一九八〇〕『中国仏教の旅1』美術出版美乃美。

中国仏教協会・日中友好仏教協会編〔一九八〇〕『中国仏教の旅2』美術出版美乃美。

中国仏教協会・日中友好仏教協会編〔一九八〇〕『中国仏教の旅3』美術出版美乃美。

張林堂編〔二〇〇七〕『響堂山石窟碑刻題記総録』外文出版社。

塚本善隆〔一九三五〕『石経山雲居寺と石刻大蔵経』『東方学報』第五冊副刊、東方文化学院京都研究所。

塚本善隆〔一九七五〕『塚本善隆著作集第五卷 中国近世仏教史の諸問題』大東出版社。

辻本俊郎〔一九九九〕『無量寿経論』テキスト考『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班。

辻本俊郎〔二〇〇四〕『無量寿経論』テキスト考（その2）『アジア文化学科年報』第七号。

辻本俊郎〔二〇一〇〕「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」『東アジア研究』第五四号。

藤堂恭俊〔一九八八〕「房山雲居寺石経と浄土三部経」『佛敎大学仏敎文化研究所報』第五号、一〇二六頁。

常盤大定〔一九二六〕『中国仏敎史跡踏査記』国書刊行会。

宮崎展昌〔二〇一九〕『大蔵経の歴史―成り立ちと伝承―』方丈堂出版。

水野清一、長広敏雄〔一九三七〕『響堂山石窟考』東方文化学院京都研究所。

野沢佳美〔二〇一五〕『印刷漢文大蔵経の歴史―中国・高麗篇―』立正大学情報メディアセンター。

李裕群〔一九九七〕「鄴城地区石窟与刻経」『考古学報』四五二〇―四五三三頁。

李裕群〔二〇〇三〕『北朝晚期石窟寺研究』文物出版社。